

NRI 学生小論文コンテスト2014

募集告知から審査、 そして表彰まで

厳正な審査を経て、決定される入賞論文

入賞論文は、予備審査→1次審査→2次審査→最終審査会というステップを経て、決定しています。

予備審査—まず事務局が、応募論文すべてについて、応募基準をクリアしているか審査しました。

1次審査—NRIグループの社員128名が、手分けをして審査。その結果、評価の高かった論文24本（大学生の部：8、留学生の部：6、高校生の部：10）が2次審査に進みました。

2次審査—審査委員10名がそれぞれ24の論文を読み、評価基準に基づいて採点、順位付けを行いました。

最終審査会—審査委員10名が集まり、最終審査を実施。長時間にわたる議論の末、10本（大学生の部：3、留学生の部：3、高校生の部4）を入賞論文として選びました。

どの段階においても、規定の評価基準に基づき、応募者の学校名、名前などの属性を秘匿したうえで、厳正に審査を行っています。また、評価が偏らないように、1つ1つの応募作品を複数の者が評価しています。

「NRI学生小論文コンテスト2014」審査ステップ

募集 2014年6月30日～9月5日 コンテストの告知活動を通じて応募を呼びかけ

予備審査 9月10日～10月17日 事務局で応募論文が応募基準を満たしているか確認

1次審査 10月18日～11月5日 NRIグループの社員128人が論文を評価、24本の論文が2次審査へ

2次審査 11月10日～11月17日 審査委員10名が24本の論文を評価

最終審査会 11月21日 審査委員が集まり、議論を経て入賞論文10本を選出

入賞論文発表 11月28日 NRIホームページにて発表

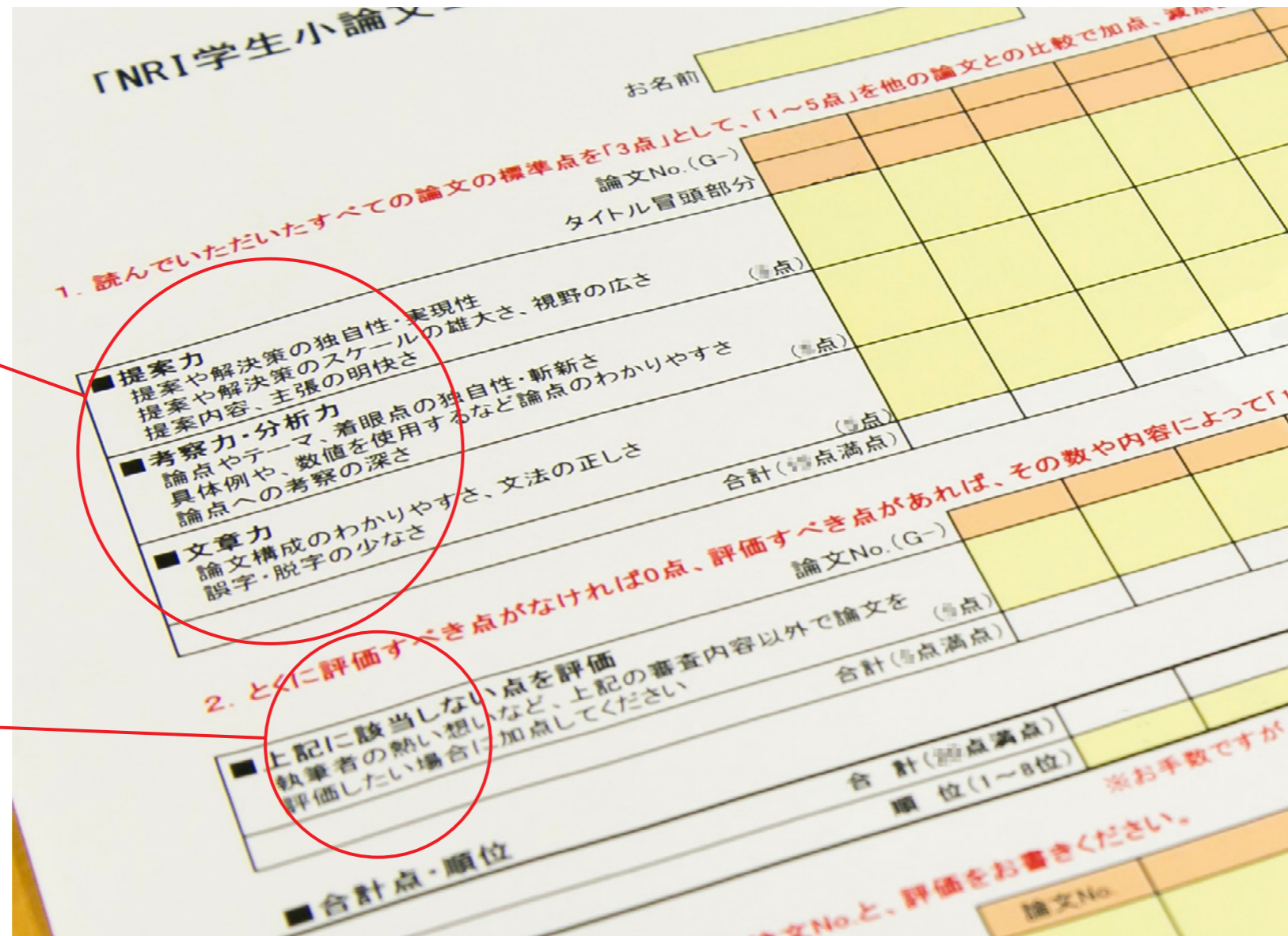
論文審査の評価基準

- テーマと論点の整合性
- 提案力
 - ・提案や解決策の独自性・実現性
 - ・提案や解決策のスケールの雄大さ、視野の広さ
 - ・提案内容、主張の明快さ
- 考察力・分析力
 - ・論点やテーマ、着眼点の独自性・斬新さ
 - ・具体例や、数値を使用するなど論点のわかりやすさ
 - ・論点への考察の深さ
- 文章力
 - ・論文構成のわかりやすさ
 - ・文法の正しさ、誤字・脱字の少なさ

評価基準以外のプラスアルファ

- 上記に該当しない点を評価

評価基準以外の尺度においても特に評価が高い論文は、ここで加点されます（例えば、執筆者の熱い想い、独自の調査・取材の実施、など）



最終審査会

審査委員が議論を深め、 入賞論文を決定



審査委員

審査委員長

谷川 史郎 NRI 理事長

副審査委員長

椎野 孝雄 NRI 理事

特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト・東京工業大学教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

審査委員

三浦 智康 執行役員 未来創発センター センター長

淀川 高喜 研究理事

中野 ひなつ 証券ソリューション事業六部 部長 兼 証券ソリューション推進四部 部長

山之内 亜由知 IT 基盤技術部 上級システムコンサルタント

野呂 直子 コーポレートコミュニケーション部 部長

横山 喜一郎 CSR 推進室 室長

NRIグループ社員による1次審査を通過したのは

24の論文(大学生の部8、留学生の部6、高校生の部10)。

2次審査には、審査委員長を務めるNRI理事長の谷川史郎をはじめとする社内審査委員に、特別審査委員の池上彰さんと最相葉月さんが加わります。

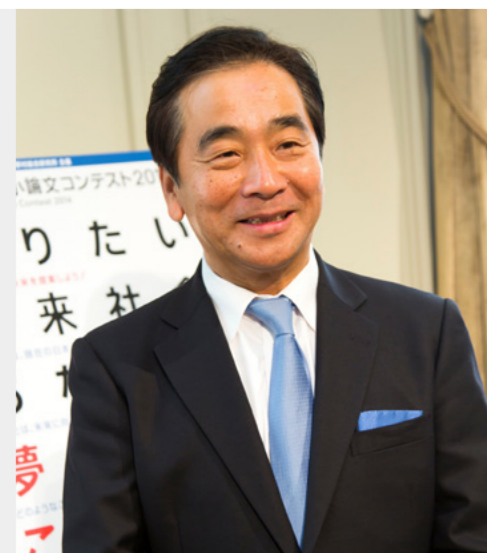
10人の審査委員は、まず各自で24の論文全てを読み、審査基準に基づいて評価、順位付けを行いました。

事務局がその結果を集約したうえで、2014年11月21日に最終審査会を開催。議論を深めながら10の入賞論文(大学生の部3、留学生の部3、高校生の部4)を選定しました。

審査委員長

谷川 史郎 NRI 理事長

今年は、自らの体験をベースにしながら、世界や日本が抱えるさまざまな問題の解決を提案する論文が多く見られました。入賞作品に共通していたのは、日本にある、まだ活用されていないリソース(資源)を問題解決のためにつないだり、人々の温かい心をうまくつなぐといった、『つなぐ』という提案であったと思います。今までにない組み合わせによる『つなぐ』取り組みが実践されれば、今よりもっと明るい未来社会が訪れるだろうと、希望を持ちました。



特別審査委員

池上 彰さん ジャーナリスト・東京工業大学教授

今年のテーマは「夢とこだわり」を問うものでした。全体のレベルは一定以上で、どれも大変読み応えがありました。期待値が高くなったがゆえの厳しい意見を申し上げるなら、「こだわり」についてはよく表現されていましたが、「夢」についてはこじんまりとまとまっている感がありました。もっと夢を語ったり、破天荒と思われるくらい大きな構想を描く力を付けてほしい。そうすれば、さらに読み応えのある論文が増えるだろうと期待しています。



特別審査委員

最相 葉月さん ノンフィクションライター

「創りたい未来社会」というテーマに対して、現在の課題の解決を図ろうとする論文がほとんどでした。私にはこれが、若い世代が夢を語らなくなっているのではなく、逆に着実に未来を見据えていることの表れだと感じられました。日本や世界の抱える現在の課題を何とかして乗り越えていかなければ、明るい未来は来ないということを、若い世代はしっかり認識しているのです。個人的な思いよりも世界に対して広く視野が開かれたものや、いじめや子育て支援といった目下の課題を取り上げたものがあった点も、頼もしく思いました。



ドキュメント最終審査会

—さまざまな「夢とこだわりの未来社会」を前に
3時間の熱い議論を展開

2014年11月21日、最終審査会で一堂に会した審査委員の約3時間にわたる白熱した議論の一部を誌上に再現します。なお、各論文の応募者の情報は一切伏せられたうえで、審査は進められています。



大学生

大学生の部

専門分野や経験に根差した、筆者の想いとこだわり

入賞候補論文 *文中での呼称

- インクルーシブ教育の実現に向けて——地域から創る、「福祉教育の日本」 *「インクルーシブ教育」
- 2025年問題に対する3つの提案——医学生から考えた日本の医療の展望 *「2025年問題」
- 小一の壁から小一の扉へ「高齢者宅による学童保育」 *「小一の壁」

※他に5つの論文が入賞候補に残りましたが、誌上では上位入賞の3論文について取り上げました。

創りたい社会への想いの強さを評価

山之内——大学生の論文は、論文としての構成は非常に立派で、よく考えて手堅くまとめられているという印象を持ちました。

中野——例年よりバラエティ豊かで、非常に楽しく読みました。

淀川——テーマが教育や医療に集中していて、問題意識や解決策があまり斬新でないと思いました。そのため、論文としての上手さで選んだ面があります。

三浦——「創りたい未来社会」というテーマなので、社会を変えたり、多くの人に関わる提案かどうかを意識して評価しました。その意味で、「小一の壁」と「2025年問題」を推したいと思います。

池上——私は「インクルーシブ教育」を最も高く評価しました。幼い頃の体験をきっかけに、あるべき社会の実現を志した情熱が感じられます。次いで「2025年問題」は、医療の現状分析に基づいて、医学生から説得力ある論文にまとめています。「小一の壁」は、高齢者による学童保育という少子高齢化問題を逆手に取った提案で、非常に具体的である点が良かったです。

椎野——「インクルーシブ教育」は、論理展開には少し甘いところがありますが、問題意識の新鮮さが光っていて、高く評価しました。

中野——私も「インクルーシブ教育」は、特に筆者の想いが強く表れていて、印象に残る論文だと思います。

野呂——「インクルーシブ教育」は、日本が後れている障害者教育の議論を、あえて取り上げていて斬新さを感じます。地域社会を巻き込む策や、「日本を福祉国に」という想いが明確に

副審査委員長

椎野 孝雄

NRI理事

課題解決型の提案が多かった
ので、より豊かな世界を追求する、
夢のある提案がもう少し欲しかった
という印象があります。大学生・留学生の
論文では、しっかりと調査を行って裏付けし、
提案に結びつけるという、論文としての
体裁を重視しました。



表れている点も評価したいと思いました。

山之内——私も「インクルーシブ教育」の考え方に共感しました。「小一の壁」は評価する意見も出ていますが、私は親として、人の目の行き届かない高齢者宅での学童保育に子供を預けるのは、正直言って不安があると思いました。

最相——今の意見にドキッとしましたが、私は「小一の壁」を評価したいと思います。背に腹は代えられないと言うか、働く親の中には、高齢者宅による学童保育があれば助かる人もいると思うのです。確かに犯罪面の課題はありますが、筆者もそれを想定していて安全対策もよく考察されています。高齢者の見守りにもつながる、発展性のある良い提案だと感じました。

特別審査委員賞の議論が白熱

椎野——まず、大賞について議論したいと思います。

池上——得点も最も高く、評価が高い「インクルーシブ教育」が大賞で異論はないでしょう。

椎野——そうですね。大賞は「インクルーシブ教育」に決定します。次に特別審査委員賞ですが、候補は「2025年問題」と「小一の壁」です。特別審査委員の池上さん、最相さん、いかがでしょうか。

池上——「小一の壁」は反対意見が出ているので、「2025年問題」が良いのではないのでしょうか。

山之内——私は「小一の壁」に対して先ほど反対意見を述べましたが、最相さんの「高齢者の見守りにもなる発展性のある提案」という意見を聞き、「なるほど」と思いました。安全対策がしっかりしているのならば、提案として評価できると思います。

最相——私はぜひ「小一の壁」を推したいですね。安全面を心配する審査委員の方は、表彰式のときに筆者と直接ディスカッションしてみたいかがでしょうか。

池上——では、特別審査委員賞は「小一の壁」にしましょう。

椎野——「2025年問題」は、得点から言って優秀賞で異論はないと思います。では、大学生の部の入賞論文は、大賞は「インクルーシブ教育」、優秀賞は「2025年問題」、特別審査委員賞は「小一の壁」に決定します。

審査委員

山之内 亜由知

IT基盤技術部
上級システムコンサルタント

自分の専門分野や、興味やこだわりに対する熱意がよく表れている論文が多かったと思います。その中で、世界に開かれた目線の感じられるものや、自らの行動姿勢を表現しているものを高く評価しました。



ドキュメント最終審査会
 —さまざまな「夢とこだわりの未来社会」を前に
 3時間の熱い議論を展開

留学生の部

問題意識を掘り下げ、新たな視点を提示

入賞候補論文 *文中での呼称

- 若者でつなぐ伝統産業と未来社会——人的資本の活用による伝統産業の継承 *「伝統産業」
- 良好な隣国関係を築ける社会の第一歩へ——日中青少年交流事業の強化について *「日中青少年交流事業」
- 博士活用社会の実現を目指した博士・ポストドクターの国際コミュニケーター派遣制度の提案 *「ポストドク」

※他に3つの論文が入賞候補に残りましたが、誌上では上位入賞の3論文について取り上げました。

“留学生”にとどまらない、広い視点

三浦——留学生の論文は、「視野は少々狭いが、良く書けているもの」と「視野は広いが、掘り下げが足りないもの」に分かれていた印象で、審査が難しかったです。課題設定の目線の高さ、インパクトの大きさを重視しました。

中野——留学生の論文は、全般的に深堀り感が少し足りないという印象を持ちました。

椎野——「日中青少年交流事業」は、調査、問題点の指摘、提案という、論文としての構成がしっかりしています。

池上——私は「ポストドク」を最も評価していて、日本の抱えるポストドク問題を真剣に考えてくれている姿勢に打たれました。次点で評価した「伝統産業」は、日本人では気づかない伝統文化、産業再生、継承策について、若者労働者やペイシエントキャピタルの活用という視点で提案している点が素晴らしいと思いました。「日中青少年交流事業」は、将来に向けて日中



が手を携えていくために、若い人達が手をつなぐことから始めようという政策の提案に大いに共感しました。

最相——「日中青少年交流事業」と「伝統産業」が良かったです。「日中青少年交流事業」は、日中関係の行く末を真剣に心配する筆者の切実さが伝わってきました。「伝統産業」は、取材に基づいて細部にわたって分析していて、日本人として教えられる点が多くありました。

山之内——私も「伝統産業」を評価します。留学生ならではの自国の文化を大切に思う気持ちから日本の伝統産業に着目していて、その視点を嬉しく思いました。筆者の強い危機感が感じられる「日中青少年交流事業」、「ポストドク」は甲乙つけがたいものがあります。

横山——評価が非常に難しかったのですが、「ポストドク」は、留学生として感じた違和感を提案へとつなげている視点が良かったです。「日中青少年交流事業」は、日中の関係改善策を既存事業の制度改革や既存の組織を活用することで進めるという、地に足の着いた提案をしている点を評価しました。

野呂——改めて日本人としてのアイデンティティに気づかせてくれる「伝統産業」を最も評価しました。日本にいと気づかない問題点を指摘し、具体的な解決策を示している「ポストドク」も良かったです。

中野——私が1位にしたのは「ポストドク」で、博士やポストドクの置かれた現状の課題をしっかりと考察していて、解決策に納得感を生んでいると思います。次いで評価したのは「伝統産業」で、留学生が日本人以上の知識を持っていることに素直に感心しました。

淀川——「伝統産業」は、その再生に向けて現代的な手法を考案しているアイデアを評価しました。「ポストドク」は、博士人材の求人難と非国際化の問題を鋭く捉え、海外での活躍に打開策を見出している点が良いかったです。両作品とも、課題を

審査委員

横山 喜一郎

CSR推進室 室長

医療、教育、少子高齢化、国際関係などにテーマが集中して多様性が少なくなっている分、審査が難しかったです。独自の観点を提示している論文や、これまで気づけなかったことに気づかせてくれる論文には魅力を感じます。



審査委員

淀川 高喜

研究理事



全体的に、テーマ選定や問題意識の斬新さが弱いと思いました。そのため、視点のユニークさ、理解の深さ、実現可能性に着目しました。留学生の論文には、大学生の論文に比べても遜色ない、日本語の文章力が非常に優れたものが多かったです。

捉える視点が深く、それを自らの提言につなげています。

最相——「ポストドク」は1位、2位をつけている人が多いのですが、私はポストドクを外国に派遣するという提案は修業期間を延長してしまうことになり、根本的なポストドク問題の解決にならないのではないかと危惧するのですが…。

三浦——私は「ポストドクは意図的に日本の外へ出て行くべきだ」という意見には共感します。

評価の分かれるなか、優秀賞が決定

椎野——では候補の「伝統産業」、「ポストドク」、「日中青少年交流事業」の中で、まず大賞を議論したいと思います。

池上——大賞は、多くの審査委員が高く評価していて、点数的にも最も高い「伝統産業」がふさわしいのではないのでしょうか。

一同——賛成。

椎野——次に優秀賞ですが、点数的には「日中青少年交流事業」、「ポストドク」の2つとも高いですね。

三浦——「ポストドク」は評価が二極化していますね。

椎野——「日中青少年交流事業」は優秀賞で異論はないと思います。「ポストドク」についても、評価は分かれていますけど得点面で優秀賞にふさわしいと思うのですが、先ほど意見を述べた最相さん、いかがでしょうか。

最相——優秀賞が良いと思います。表彰式で直接本人と会って、ぜひディスカッションしたいと思います。

椎野——では留学生の部の入賞論文は、大賞は「伝統産業」、優秀賞は「日中青少年交流事業」と「ポストドク」に決定します。

ドキュメント最終審査会

—さまざまな「夢とこだわりの未来社会」を前に
3時間の熱い議論を展開

高校生の部

筆者の強い想いと視野の広がり

入賞候補論文 *文中での呼称

- さくらんぼネットワークの構築——世界を救い、日本を変える *「さくらんぼネットワーク」
- 「アグロフォレストリー」——日本と東南アジアの掛け橋 *「アグロフォレストリー」
- 子どもの笑顔が溢れる社会——ネットいじめ解決への提案 *「子どもの笑顔が溢れる社会」
- 世界中の子供たちがつながっていく *「世界中の子供たち」

※他に6つの論文が入賞候補に残りましたが、誌上では上位入賞の4論文について取り上げました。

大賞には審査委員の意見が一致

椎野——高校生の論文は、論文としての体裁や実現性より、筆者の想いの強さや提案の具体性を重視したいと考えています。

池上——私は「世界中の子供たち」を一番に推したいと思います。世界共通の「世界-world-」という授業の提案は「確かに」という思いを持ちました。「さくらんぼネットワーク」は、世界へ向けた日本の新しい貢献であると思います。ネーミングも素晴らしいですね。

三浦——「さくらんぼネットワーク」は、海外のさくらんぼ世代の子たちを集めて、多くの人を巻き込んで日本の社会をグローバル化するという提案で、内容も具体的に設計されています。実現すれば日本の社会が変わりそうで、期待が持てるなと感じました。

最相——一番評価したいのは「さくらんぼネットワーク」です。この筆者は、命を守ること、命の危機から救うことの大切さを主張していて、感銘を受けました。論文の体裁は「アグロフォ



レストリー」が優れていると思います。

淀川——「アグロフォレストリー」は、東南アジアの森林消失と日本の里山の荒廃を併せて解決するというアイデアが面白いと思いました。

椎野——「アグロフォレストリー」は、東南アジアの森林破壊の危機感から日本と東南アジアの状況を分析し、それぞれの問題を解決するために必要なことをしっかり提案しているところが良いと思いました。

野呂——「さくらんぼネットワーク」が群を抜いていると思います。新興国の子供を救いたいという筆者の問題認識や、子供たちを日本に迎えるという解決策は、日本のグローバル化の後れへの解決にもつながり、素晴らしいと思いました。

中野——「さくらんぼネットワーク」と「アグロフォレストリー」を高く評価しました。「さくらんぼネットワーク」には筆者の強い想いが感じられ、具体策の細やかな記述によって、実現イメージが浮かんできます。「アグロフォレストリー」は、論文としての完成度が一番高いと思います。東南アジアの森林と日本の里

山を結びつける解決策にも「なるほど」と感心させられました。

山之内——「アグロフォレストリー」と「さくらんぼネットワーク」はどちらも視点が素晴らしく、甲乙つけがたかったです。

横山——「アグロフォレストリー」を最も高く評価しました。アジアの森林破壊と日本の里山作りをつなげている点がとても面白く、自らの夢を実現するために行動宣言しているところも良いと思います。「子供の笑顔が溢れる社会」は、対面コミュニケーションの大切さを訴えている点に共感しました。

椎野——全員の評価を合わせると、大賞は「さくらんぼネットワーク」で異論ないと思いますが、いかがでしょうか。

——同——賛成。

池上さん、最相さんの推す作品が特別審査委員賞に

椎野——次に、優秀賞と特別審査委員賞を議論したいと思います。候補は「子供の笑顔が溢れる社会」、「世界中の子供たちがつながっていく」、「アグロフォレストリー」です。この中で「アグロフォレストリー」は最も得点が高いので、優秀賞にふさわしいと思います。

最相——池上さんが1位、私が3位を付けている「世界中の子供たち」は、特別審査委員賞でいかがでしょうか。

池上——同感です。ぜひ特別審査委員賞をお願いします。

椎野——「アグロフォレストリー」のほかに、もう1点、「子供の笑顔が溢れる社会」に優秀賞を出すかどうかなのですが。

淀川——「子供の笑顔が溢れる社会」は「ネットいじめ」という大切な問題を取り上げていますが、「夢」というテーマから見て、どう評価するべきか迷いますね。

最相——いじめの問題は、足元の問題として非常に重要ですので外すことはできないと思います。子供たちは笑顔になることによって、未来を考えるスタートラインにも立てるという意味で、私は「子供の笑顔が溢れる社会」を評価したいと思います。

山之内——「子供の笑顔が溢れる社会」は全体的に高い順位が付いていて、優秀賞にふさわしいのではないのでしょうか。

椎野——そうですね。「子供の笑顔が溢れる社会」を優秀賞としたいと思います。高校生の部の入賞論文は、大賞は「さくらんぼネットワーク」、優秀賞は「アグロフォレストリー」と「子どもの笑顔が溢れる社会」、特別審査委員賞は「世界中の子供たち」、以上4作品に決定します。



審査委員

中野 ひなつ

証券ソリューション事業六部 部長 兼
証券ソリューション推進四部 部長



筆者の想いやこだわりが強く表れている論文を評価しました。問題意識や具体策の掘り下げが不足していたために、提案内容が良くても高評価できなかった作品が見受けられたのが残念でした。もう少しの努力で、更に素晴らしい論文になるものが沢山あるという印象です。

審査委員

野呂 直子

コーポレートコミュニケーション部 部長



提案に新たな気づきや発見があるか、新鮮さを感じられるかをポイントに評価しました。高校生・留学生の論文には、訴えたい想いが強く伝わってくる作品が多かったです。

論文発表会

NRI社員らを前に 入賞者が未来社会への “夢とこだわり”をプレゼン

2014年12月19日、東京・丸の内でのNRI本社において「NRI学生小論文コンテスト2014」の論文発表会が行われました。NRI代表取締役副社長の室井雅博をはじめ、審査に関わったNRIグループ社員を前に、10名の入賞者全員が論文につづった提案内容を発表しました。



NRI代表取締役副社長の室井雅博(右下)と入賞者たち

論文発表会は、NRI代表取締役副社長の室井雅博の挨拶からスタート。「受賞者の皆さんが一生懸命考えてくれた、日本や世界の未来のための提案を大変楽しみにしている。ここに集まってきている社員も同じだと思う。皆さんの想いや発想とNRI社員の英知を合わせて、日本や世界の明るい未来に貢献していけたら嬉しい」と受賞者たちの未来へエールを送りました。

その後、大学生3名、留学生3名、高校生4名の入賞者が、緊張しながらもしっかりとした語り口で、プレゼンテーションを行いました。会場に集まったNRI社員らは熱心に発表に聞き入り、入賞者1人ずつに渡されるメッセージカードに感想を書き入れていました。



発表会の後は、社員や応援に駆け付けたコンテスト入賞のOB・OGを交えて、グループディスカッションが行われました。そこで出た意見や感想の一部をご紹介します。

プレゼンについて

NRI社員「初めて参加しました。皆さんの発表を聞いて、その想いの強さに感動しました」

NRI社員「経験をばねに頑張っている姿に心打たれました。たくさんの気づきとエネルギーをもらいました」

入賞者(大学生)「多くの方に自分の意見をお伝えできたことが、嬉しいです」

入賞者(留学生)「プレゼンは苦手で、悪戦苦闘しました」

入賞者(留学生)「皆さん独自の視点から問題を捉えています、その根底には“日本の社会を良くして行こう”という共通した想いがあると感じました」

入賞者(大学生)「それぞれの提案には、自らの体験に基づいて問題点を解決の方向に転換させる、柔軟な考えがありました」

入賞者(高校生)「自分の論文にはまだまだ問題点や課題が多



いのですが、皆さんの提案には問題点を解決するための自分なりの考えがしっかりあって、勉強になりました」

入賞者(高校生)「高校生に意見を発表する機会を与えて下さる会社は、多くないと思います。ありがとうございました」

NRI社員「失敗してもいいから、ぜひ今後、提案内容を実践して欲しいです。何事もトライアル&エラーです」

NRI社員「皆さんが提案されたようなことが、これからの世の中を切り開いていくのではないかと感じました」

審査にあたって

NRI社員「毎年いろいろな論文が出てきて、若い人達が評論家的ではなく“自分はこういうことをやるんだ”と発信していて、非常に楽しく審査しています」

NRI社員「ここ5年ほど1次審査を担当しています。私たち大人がつい“無理だな”と思って考えを閉ざしてしまうことを、皆さんは発想の豊かさで乗り越えていき、教えられることがたくさんあります」



NRI社員「1次審査を担当して6年目です。入賞者の方と会えるこのイベントは、毎年私にとって楽しみです」

NRI社員「特別審査委員の池上さんと最相さんは、大変お忙しい中、毎年しっかりと応募論文を読んで審査にあたって下さっています。お二方に審査委員になっていただいていることは、このコンテストの財産だと思います」

入賞者(大学生)「講評をうかがうのが、とても楽しみです」

OB・OGとのつながり

NRI社員「何年も続けて過去の受賞者とのつながりを持っているコンテストは他にあまりないと思います。ここで生まれたつながりを、これからも活かしていっていただけたら嬉しいです」

OB「第1回コンテストで入賞し、今は起業してWeb系の事業をしています。このコンテストに応募する人はエネルギーや行動力があって、実際にリサーチした上で提案していて、素晴らしいと思います」

OG「毎年参加しています。自分にはない発想を知ることができて、いつも新しい発見があります。今年もとても面白かったです」

OB「招待していただいて嬉しいです。プレゼンを聞いて、とても刺激になりました。自分自身も何か社会に貢献できたらと思いました」

OG「これからもOB・OGでつながっていけたらいいなと思います。このコンテストがきっかけでCSR(企業の社会的責任)に興味を持ち、イギリスの大学に留学することにしました」

OB「皆さんのプレゼンを聞いて、自分の調べたデータや取材した結果を元に自分の主張を述べることの大切さを再認識しました」

入賞者(高校生)「自分はこういう場を経験するのは初めてなので、他の入賞者や審査委員の皆さん、OB・OGの方々と話できて、とても勉強になりました」



受賞、おめでとうございます！



2014年12月20日、入賞者とその家族、学校関係者を招き、東京ステーションホテルにおいて表彰式と祝賀会が開催されました。

表彰式は、NRI代表取締役社長の嶋本正の祝辞からスタート。嶋本は「これからの社会を担っていく皆さんには、将来、自分になりたい姿、果たしたい役割を思い描く“Vision”、相手の立場に立ち、広い視野、より高い視点を持つ“View”、自分の価値、強み、誇れるものを磨く“Value”—この3つのVをぜひ大切にしていってほしい」と祝いの言葉を述べ、入賞者一人ひとりに表彰状と副賞を手渡しました。

続いて、審査委員長であるNRI理事長の谷川史郎、特別審査委員を務めたジャーナリスト・東京工業大学教授の池上彰さん、ノンフィクションライターの最相葉月さんが、お祝いの言葉とともに、入賞論文一つひとつに講評を述べました。



表彰式に続いて行われた祝賀会で、[大学生の部] [留学生の部] [高校生の部]、それぞれの部門で大賞を受賞した3名が、喜びの言葉を述べました。



【大学生の部】大賞 城内香葉さん 慶應義塾大学 総合政策学部2年

今回、私の論文を評価していただいたことを、大変光栄に思っています。私が小学生の頃から抱いてきた想いやこれまでの行動を振り返ると、この論文は本当に長い時間をかけて、私のすべての想いを込めて書いたものなのだなと感じています。インクルーシブ教育を実現させることは簡単なことではありませんが、これからも自ら発信し続けていきたいと考えています。また、今回出会った方たちとのつながりを、今後も大切にしていきたいと思います。



【留学生の部】大賞 陳慕薇さん 京都大学大学院 経済学研究科 修士課程2年

私は以前から日本の伝統産業に関心を持っていましたが、修士論文では経済学の面から伝統産業を研究することが難しく、他の分野を扱いました。でも、伝統産業に対する関心や情熱はまったく衰えておらず、むしろ増えています。今回受賞できたことや、NRIの皆さんや池上さん、最相さんに伝統産業の研究を続けるようにと励ましをいただいたことで、今後も研究を続けていこうという想いを強くしました。ありがとうございました。



【高校生の部】大賞 韓大鏞さん 神戸朝鮮高級学校2年

私がこのコンテストに応募した理由はただ一つ、在日朝鮮人という存在を多くの人に知ってもらいたいという想いがあったからです。日本に住んでいる朝鮮人だからこそ、見ることができるもの、考えることができることがあることを、皆さんにお伝えしたいと思いました。また、私の通う神戸朝鮮高級学校は、このコンテストの受賞者を過去何人も出している、優れた学校であることもお伝えしたいと思います。このたびはこのように場に参加する機会をいただき、本当にありがとうございました。

祝賀会では、入賞者と池上さんや最相さん、NRI社員、学校関係者や家族が、和やかな雰囲気の中で、交流を深めました。池上さんや最相さんの著作を持参してサインをお願いしたり、論文の内容について語り合ったり、記念撮影をしたりと、終始リラックスした入賞者の姿が見られました。



「創りたい未来社会～あなたの夢とこだわり～」 というテーマにひかれた

大学生

テーマに興味

- 「創りたい未来社会」という言葉に心ひかれたから
- ゼミの先生からコンテストを紹介され、興味を持った。「私の夢とこだわり」について一度じっくり考える機会になると思い、応募した
- テーマにすごく興味を持って、チャレンジしようと思った

自分の考えを発信し、他の人と共有したい

- 自分の考えを形にしたい、また、より多くの人と共有したいと考えたため
- 情報を受け取るだけでなく、アウトプットする経験を積みたかったから。また他者と共有したいという思いがあったから
- 私は未来の夢を持っているが、その夢を伝えるチャンスが今までなかった。このコンテストは私の考えを伝える場所だと思った
- 留学を通じて感じたことを文章で表現したいと思った

研究の集大成

- 学生時代の集大成として、学生にしかできない形で論文発表してみたかった
- 大学の研究室で学んでいる内容と関連付けて、未来社会への提案ができるのではないかと考えたから
- 大学で行っている研究とコンテストのテーマがマッチしていると感じたから

留学生

自分を見つめ直す・自分への挑戦

- 20歳になった記念に、文字にすることで今の自分の思考を明確化したいと思った
- 将来の夢に向けて、今の自分自身を見つめ直す機会にしたかった
- 他大学の学生と競争することで、自分の力を試してみたいと思ったから
- 留學生活の最後に新しいことに挑戦したいと思い、応募した
- 自分の考えを磨き、他の応募者と切磋琢磨できると考えたから

世界を良くしたい

- 世界各地ではまだ紛争が絶えない。何の罪のない人たちが傷つき、犠牲となっている。この不条理な状況を何とかしたい。平和で豊かな未来社会を創造する糸口を見い出そうと思った
- 今の日中関係は微妙な関係になってしまった。その関係を自分の小さい力で少しでも良い方向に変えたいと思ったから

論文を書く力や日本語力を高めたい

- 卒業論文を書く練習として応募した
- 論文を書くことが大学生活において一番の力になると思い、挑戦しようと思いました
- 留学のために来日して4年が経ち、4年間の勉強で得た日本語能力と知識を試すために応募した

高校生

テーマにひかれた

- 「創りたい未来社会」というテーマにひかれて、自分でも書いてみたいと思ったから
- 募集テーマを見て、「これなら書いてみたい!」と思ったから
- いろいろな論文の募集があった中で、自分の考えを一番伝えられるテーマだったから
- 書きやすいテーマで、言葉にすることで自分の夢を具体的にしたいと応募しました
- テーマの自由度が高くて、魅力的だったから
- テーマが今の自分にぴったりだと思いました
- 自分のことで精一杯だった私にとって、「創りたい未来社会」というテーマは社会について考える良い機会だと思ったから

未来社会を考えたい

- 自分がこれから生きていく社会をどんなふうにしていきたいか、考えてみようと思ったから
- 次世代を担う私たち高校生が、未来のビジョンを明確に意識することは重要なことだと思ったから
- 高校生活最後の夏休みに、未来について考えたいと思ったため
- 高校生として自由な意見を発表することによって、社会に何らかの貢献ができればと思ったため
- 今までしっかりと考えたことがあるのは、自分の身の回りの未来だけだったが、地球規模の広い世界の未来について考えてみたいと思ったから

自分の意見の発信

- 私たちのような世代の子供がこんなことを考えているのだということを知ってほしかったから
- 自分にどれだけできるか挑戦のつもりで応募した
- 自分の夢について語れる良い機会です、楽しそうだったから
- 高校生が自分の意見を広く発表できる機会は多くないので、それを社会に出せるということで応募した

勉強のため

- 授業で小論文を書き、自分の意見・考えを文章にまとめ、相手に伝えることに興味を持ったから
- 論文を書くことで、自分の書く能力を向上させたいと思ったから
- 大学入試の小論文対策
- 夏休みの課題
- 小論文の授業の課題

NRIグループ社員による審査の感想

社内審査委員をつとめた社員が感じたこと

大学生

強い思い、問題意識

- 学生の熱い思いがたくさん伝わってきた
- 「世の中を変えたい、良くしたい」という強い思いが感じられた
- 自分の体験・経験をきっかけにした社会的な課題に対して、自分なりのアイデアをもって解決しようとしているところに、前向きさと力強さを感じた
- 学生が社会に対して問題を感じていること、その問題に対して実際に行動を起こしていることが分かった
- 社会の問題を纯粹に受け止め、創造的な解決策を構想することができるという、若者の力を改めて感じる事ができた

面白かった、刺激になった

- テーマの選び方、解決へのアプローチ共に興味深いものが多くあった
- 予想に反して面白く、刺激になった
- テーマが分かりやすいこともあるのか、以前大学生の部を担当したときより具体性があり、ユニークなものが増えたと思う

具体性に欠ける

- 実現案の具体性に乏しく、問題提起や表面的な案にとどまっている内容が多かった
- 夢として社会がどうあってほしいかは書かれているが、その状態をどのように実現するかについては、具体性に乏しいものが多かった

「世の中を変えたい」という強い問題意識

もっと独自性・斬新さを

- 全体的に夢が感じられない。独自性や斬新さ、自分のこだわり・意見に乏しい
- 「創りたい未来社会～あなたの夢とこだわり～」というテーマに対して、現在の課題についての現実的な解を述べたものが多いのに驚いた
- 夢やこだわりを感じさせる論文がないことを残念に思った。論理破綻があるが、自分の奥底からわき出る夢を熱く語ってほしかったのだが、大学生ともなると難しいのだろうか？
- NHKをはじめとする社会問題を取り上げている番組そのままの内容ではないかと思われるものも混在しており、筆者のオリジナリティをどのように見極めるのか難しく感じた

視野が狭い

- 自分の経験や見聞きしたこと、あるいは書籍やメディアからの情報に影響を受けすぎて、視野が狭くなっているのではないかと感じた
- ほぼ全ての論文が「日本」に対する提案だったので、「世界」を意識し、より広い視野で解決策を考えることもしてほしい
- 「世界に向けて未来を提案している？」と思ってしまうような内容が多かった。熱意はあるが、日本の未来社会を主体にしていて世界の狭さを感じた

留学生

グローバルな視点

- 留学生の立場として、自国と日本、両国の状況をしっかり捉えている印象を覚えた。他国の現状まで踏み込んだグローバルな視点で、社会課題として自分たちがどうしていかなければならないかを考察していることに、深く感心した
- 生まれ育った国や文化的な背景は異なれど、争いを好む人はおらず、自分の問題として捉えて解決策を模索していることが分かった
- 自国の状況を透過的に比較できる視点は、やはり留学生ならではの視点だと思った

日本語力の高さ

- どの論文も、留学生が書いたとは思えないほどの文章力だった
- 留学生の日本語運用能力の高さに脱帽した

読み応えがある

- いずれの論文も非常に読み応えのある内容だった。同じテーマでも全く異なる観点で書かれており、内容も多様なため、楽しんで読むことができた
- 引用する事例の多様さが印象的だった。それぞれが多様な情報源を持っており、視野を広げてくれた

世界の現状を見つめる目

もっと主張を

- 留学生の部ということで荒々しさや新規性に期待したが、少しまとまり過ぎていたように思う。「留学生らしさ」を出して、日本社会に対して痛烈なメッセージを突き付けてくれるような作品が多く出ることを願っている
- 筆者のこだわりについて強く記述されているものは必ずしも多くなく、淡々とロジカルに整理して論証されているものが多い印象を持った

高校生 — 率直なまなざし

元気

- 高校生の若くて元気な気持ちが伝わってくる論文が多かった
- 高校生の率直な意見がとても魅力的
- どの論文もしっかりと自分の意見や主張を書き書いて、面白く読ませてもらった

刺激を受けた

- 高校生の志に触れ、私自身も刺激と気づきを得られた
- 情熱的な文章や画期的な提案も多く、読んでいて初心を思い出させてくれる

もっと提案力を

- 世の中によくある論調に影響を受けがちなのはしょうがないとしても、独自の視点を示してほしい。こざいれにまとめすぎなものが多いと感じた
- 提案に無難なものが多いように思う。丁寧な分析と確実な提案の上に、少しスパイスとして独自の強い提案が混じるくらいのもがあると嬉しかった

もっと夢を

- 「夢とこだわり」というテーマにも関わらず、あまり思いが感じられない評論的な論文が多かった
- もっと高校生らしい明るい夢を期待したい
- 想像力を発揮して「誰も考えたことのない、現在そんなものはない」といった解決方法を考えてほしい
- もう少し夢を持った話題や、その実現を大言壮語する論文が読みたかった

NRIグループ社員によるコンテスト告知活動

全国の高校や大学に赴いて応募を呼びかけ

NRI学生小論文コンテストの告知活動の柱のひとつは、有志のNRIグループ社員による「社内応援団」が担っています。ポスターやチラシを持って、母校や全国各地の学校を訪問し、生徒たちや先生たちにコンテストへの応募を呼びかけました。

会津大学

大学でのOB講演

崔 裕仁 (流通システム一部)

母校からの依頼で度々、コンピュータ理工学部の学生250名を対象に特別講義を行っています。将来設計に役立つ考え方や経験談をはじめ、「自分で課題を見つけ、考えと理解を深め、他人に説明をする力を伸ばす」ことの重要性を訴え、その訓練として本コンテストを積極的に活用するよう紹介しています。



国立有明工業高等専門学校

後輩に夢を描いてほしい

野田 裕太 (WMソリューション事業部)

母校を訪問し、生徒たちにNRIや本コンテストについて説明。「技術者の卵ならではの観点から“こういう社会ができれば”“こんなことが可能になったら”と夢を描き、それを実現するための強い“こだわり”を持ち続けてほしい」と伝えました。



島根県立松江北高等学校

私にできる母校への貢献

武田 宏美 (NRIシステムテクノ株式会社)

本コンテストには島根県からの応募が少ないことを知り、島根出身の私から母校に声をかけようと思いました。後輩の皆さんに「皆さんの未来は社会の未来です。NRIと一緒に未来を考え、未来を輝けるものにしましょう」とレターで応募を呼びかけました。



佐賀県立佐賀西高校・佐賀県立武雄高校

訪問校から入賞者が出て、嬉しさもひとしお

藤野 直明 (サービス・産業ソリューション第一事業本部付)

教育へのICT活用で有名で、自らの出身県でもある佐賀県の武雄高校から講演依頼があり、母校も含め2校で「NRI学生小論文コンテスト2014」を紹介しました。その武雄高校から今年の入賞者(特別審査委員賞)が出たことを、とても嬉しく思っています。今回、両校の校長先生から「受験勉強だけでなく、本校生徒には未来を洞察し大きなことを考える機会を与えたかった。NRIさんには大変感謝しています」という話をお聞きして、大変共感しました。受賞論文は、ドイツ留学から帰国したばかりの野田かれんさんが自らの体験から考えた思い切った提案で、内容についても唸られるものであり、大変感心しました。本コンテストを、ぜひ生徒の皆さんの『ありがたい未来社会』を考える契機にさせていただけたらと思います。



先生から見た「NRI学生小論文コンテスト」

群馬県立女子大学 国際コミュニケーション学部
(大学生の部 特別審査委員賞受賞者の在籍校)

安斎 徹 准教授

私のゼミは『社会デザイン』という名称で、社会を変える人を作るという目標を持っています。その目標と本コンテストのコンセプトが合致しているため、ゼミとして取り組み、3年生全員で応募しました。本コンテストは、論文を5千字にまとめる力や論理性が求められ、教育の題材としても取り組みやすいと思います。初めて応募した2年前に続き、2回目の応募である今回も入賞者を出すことができ、大変嬉しく思います。地方の大学の学生が東京の学生と同じ土俵に立てる貴重な機会なので、今後も挑戦したいと思っています。



神戸朝鮮高級学校

(高校生の部 大賞受賞者の在籍校)

李 英三 教諭

当校では過去に本コンテストの入賞者を出しており、毎年生徒に応募を呼びかけています。今年希望してきた生徒はたまたま1人でしたが、練習がハードなバスケット部に所属しているため、夏休み中の練習の前後の時間を使って指導しました。自宅課題を出してもしっかり取り組んできて、その本気度合いに指導にも熱が入りました。部活と両立しながら書き上げた論文が高校生の部の大賞を受賞したことを、大変誇りに思います。今後も応募を希望する生徒を学校として応援していきたいと考えています。



宮城県宮城野高等学校

(高校生の部 優秀賞受賞者の在籍校)

伊勢 将聡 教諭

当校の総合学科では、3年生になると自分で選んだテーマを追究して発表する『課題研究』という授業があります。2013年からの取り組みとして、1年生のときから課題意識を持ってもらうために、当コンテストへの応募を呼びかけています。昨年に引き続き2年連続で応募した生徒が入賞したことを、大変嬉しく思います。2015年は3年生となり、集大成の課題研究と受験勉強で大変だと思いますが、手を挙げた生徒には課題研究の成果を生かす方向で指導し、挑戦させたいと考えています。



大阪府立佐野高等学校
(高校生の部 優秀賞受賞者の在籍校)

黒松 成輝 教諭

今回は、私が顧問をしている女子ソフトテニス部に所属している生徒が推薦入試で大学が早く決まったため、「文章を書く力を鍛えるためにチャレンジしてはどうか」と顧問として個人的に応募を勧めました。力試しのつもりが入賞し、皆さんの前でプレゼンを行ったり、多くの方と交流でき、高校生としては大変貴重な経験になったと思います。このような経験は推薦・AO入試にも大いに生きてくるので、次年度以降に担任を持った際には、1・2年生の段階から意欲のある生徒に取り組みせたいと思います。



佐賀県立武雄高等学校
(高校生の部 特別審査委員賞受賞者の在籍校)

土井 孝一 教諭

当校には、生徒が世界に視野を広げたり、さまざまな校外学習活動に参加することを積極的に応援する雰囲気があります。コンテストへの応募もその一つです。今回、「NRI学生小論文コンテスト」に当校の生徒が初めて入賞したことは、本人の大きな糧になったことはもちろんのこと、後輩にも先輩のチャレンジする姿を見せることになり、尻込みしがちな校外学習活動への参加を後押しする意味も大きいと思っています。



おわりに

NRI学生小論文コンテストでは、毎年、表彰式の前日に上位入賞者に集まってもらい、論文発表会を行っています。発表会には多数のNRIグループ社員をはじめ、本コンテストでの受賞経験をもつ皆さん(OB・OG)も駆けつけてくれます。発表会の楽しみの一つは、受賞者の発表を聞き、質問をしたり対話ができることです。

社員にとってもう一つの楽しみは、OB・OGとの再会であり、受賞後の進路や今何をしているかなどについて話が聞けることです。

この場では、「受賞がきっかけでイギリスへの大学留学を決めた」、「受賞について地元新聞社から取材を受けたことから、新聞記者に興味をもち、その新聞記者になった」など、受賞がきっかけとなって、それぞれの道をアクティブに進んでいる様子うかがえて、頼もしく思います。今回、本冊子の取材を受けていただいた、木下翔太郎さん、張辰飛さん、舛田桃香さんも、そうしたOB・OGです。

こうしてみると、本コンテストは受賞者の皆さんにとって、さまざまな「気づき」の場になっていることが分かります。なかでも意義深いこととして、それまで自分でも知らなかった自身の可能性への気づきがあり、その道を自ら切り開いていることが挙げられるのではないかと思います。

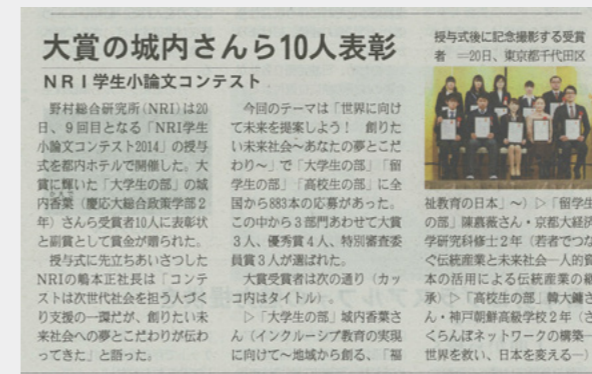
2015年度のコンテストは、開始以来10年目という節目を迎えますが、事務局ではその準備を始めています。今年も多くの皆さんにお会いできること、そこから多くの「気づき」が生まれることを、とても楽しみにしています。

2015年3月

「NRI学生小論文コンテスト2014」事務局

メディアでの掲載

NRI学生小論文コンテストは、毎年さまざまなメディアに取り上げられています。その一部をご紹介します。



「フジサンケイビジネスアイ」 2014年12月22日付 日刊20788号



「朝鮮新報」 2015年1月14日付



「佐賀新聞」 2015年1月23日付朝刊



「上毛新聞」 2015年1月19日付朝刊



「高校生新聞」 2015年3月1日発行 第224号



「中日新聞」 2014年12月5日付朝刊 県内版